

原著 (Article)

造形領域における日本とオーストラリアの 学習指導要領の比較

——幼児期と学童期に着目して——

**Comparison of Visual Arts in the Australian and Japanese
National Curriculums: Focus on Preschool and Primary
School**

森 文乃*

MORI, Ayano*

山田 真紀**

YAMADA, Maki**

キーワード：造形領域，造形表現，図画工作，ヴィジュアルアーツ，学習指導要領，
国際比較

Key words：Visual Arts, National Curriculum, Preschool, Primary school, Australia, Japan,
Comparative study

1. 研究の動機と目的

日本の図画工作・美術科教育は，創造の過程よりも結果を重視する作品主義から脱却できないことが課題であるとされている。降旗は，「造形活動の喜びを味あわせ豊かな情操を養うことが教科の目標とされているにも関わらず，やはり作品の出来を気にする作品主義ともいえる傾向が存在している」「図画工作教育にかかわる教師たちは，基本的には子ども達一人ひとりが自分らしい表現に取り組み創造活動の喜びを味わってほしいと強く願っている。しかしながら，最終的な作品の出来についても無視できないというジレンマに苛まれているのである」と述べ，教師たちの「作品主義と創造主義のジレンマ」について言及している¹⁾。藤原は，参観日前に「2歳児クラスを担当するある保育士は色画用紙をちぎり，台紙に母の顔を半立体的に貼りつけて表現させた」という事例を紹介し，幼児美術教育においても，保育者は保護者からの評価を意識し，発達段階を無視した課題を子ども達に課し，見栄えのよい作品を作らせようとする作品主義の弊害が散見される実態を伝えている²⁾。このように，日本では作品主義が，創造の過程で培われるべき子どもの感性や情操の育ちを妨げる障壁になっていると問題視されている。

我々は，そもそも幼児美術教育や図画工作は何のためにあるのか，そこでどのような活動を行い，子どもの何を育てようとしているのか，という疑問を感じるようになった。そこで世界の幼児美術教育や図画工作の目的や内容を知ること，日本のこれらの領域が大切になっていること，また日本において作品主義が問題視される背景について探っていきたいと考えた。本稿では，日本と同じように国家カリキュラムをもち，英語圏であるため資料を読み込むことが可能なオーストラリアを取り上げ，比較研究

* 椋山女学園大学大学院教育学研究科，大学院生 ** 椋山女学園大学教育学部/教育学研究科

椋山女学園大学教育学部紀要 投稿・執筆規程の2により査読を行った(2014年11月11日受付；2015年1月27日受理)

を行う。なお、我々は、就学前教育から小学校までに関心の対象とすることから、日本で用いられる「造形表現」「図画工作」、オーストラリアをはじめとする英語圏でよく用いられるヴィジュアルアーツ (Visual arts) を総称する言葉として、ここでは便宜的に「造形領域」を用いることとしたい。

2. 方 法

我々は、幼児期と学童期に関心を持っているため、それらに関わる国家カリキュラムについて扱う。幼児期については、オーストラリアの「幼児期の学習要領 *Belonging, Being & Becoming: The Early Years Learning Framework*」³⁾と、日本の「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」⁴⁾とを比較する。日本では、厚生労働省が管轄する保育所と、文部科学省が管轄する幼稚園において、それぞれ国家基準が定められているため、日本の基準として両方を参照する。学童期については、オーストラリアの「カリキュラムの構造：芸術領域 (*Shape of the Australian Curriculum: The Arts*)」⁵⁾の5-6年生までの記述と、日本の「小学校学習指導要領解説 図画工作編」⁶⁾とを比較する。

なお、オーストラリアでは、1994年から国家カリキュラムが定められてきたが、各州や直轄区が独自のカリキュラムを定めるうえで参考にする程度で、実際には州ごとに定められたカリキュラムの基準が用いられてきた。しかし2008年から「国家統一カリキュラム」の準備が始まり、2014年からはすべての州において、このカリキュラムに基づく実践が行われることになった。ヴィジュアルアーツのカリキュラムは、2008年から開発が始まり、2010年に芸術領域のカリキュラムの基準が発行された。また、幼児期の学習要領は2009年に発行された。一方、日本でも、保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領ともに、2008年に改訂されている。

3. 結果と考察

3-1. 幼児期の国家カリキュラムの比較

幼児期の国家カリキュラムの比較は、表1にまとめた。(1)造形表現の目的、(2)造形表現の内容、の2点から両国のカリキュラムを比較し、その共通性と差異について説明する。

(1) 造形表現の目的における比較

日本の保育所保育指針と幼稚園教育要領では、保育の内容を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に分け、それぞれにねらいと内容を定めている。表現領域では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」⁷⁾ことを目的として、その目的のねらいと、それを達成するための内容が記述されている。保育所保育指針では、表現領域に関する心情・意欲・態度は次のように解説されている。「子どもは毎日の生活の

表1. 幼児期の国家カリキュラムの比較

	オーストラリア	日本
基準の名称	幼児期の学習要領 Belonging, Being & Becoming: The Early Years Learning Framework	保育所保育指針 幼稚園教育要領
造形表現の目的	「子どもは効果的にコミュニケーションできる」という目的を達成するための、言語・非言語コミュニケーションや読み書きの能力の例として、芸術、ヴィジュアルアーツ、絵画、描画が示される。「彼らはアイディア、考え、疑問や気持ちを交換すること、つまり、彼ら自身のことを表現すること、他者とつながることに、本質的に興味を持つ社会的な存在である」→コミュニケーションの一形態	「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」 「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」 →コミュニケーションの一形態 →情操面での記述が散見される
共通性：環境構成	「子どもはアイディアを表現し、多様な媒体によって意味を作る。教育者はこの学びを以下のようなときに促進させる：子どもがヴィジュアルアーツ、ダンス、演劇、音楽を使って意味を伝えることができるような、多様な材料を与える」	「いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ」保育士はそのための素材や材料を子どもがいつでも取り出せるようにしておく必要がある
差異① 情操面	《記述なし》	「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れイメージを豊かにする」 「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」
差異② 作品の発展的利用	《記述なし》	「かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする」
差異③ 情報機器との関わり	「子どもは、情報にアクセスし、アイディアを深め、考えを表すために、情報通信技術を用いる。特に、デザインし、絵をかき、編集し、深く考え、作曲するツールとして情報伝達技術を使うなど」	《記述なし》

※「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」で似た表現を使用しているため、本表においては幼稚園教育要領の文言を用いた。「」表記は要領・基準からの抜き書きである。

中で心を動かしており、こうした心情を豊かに持つことが、子どもの心の成長の基盤であること、子どもは環境との関わりの中で抱いた様々な気持ちや気づきを友達や保育士等に伝えようとし、それらを自分なりに表現しようという意欲を育んでいくこと、表現することの喜びや表現を楽しむ態度養っていくこと⁸⁾。

一方、オーストラリアの学習要領では、造形表現について、日本の表現領域のように独立した記述はない。オーストラリアの学習要領は、誕生から5歳に至るまでに、

次の5つの成長がみられることを目指している。「子どもは自分が何者であるかという深い理解をもつ Children have a strong sense of identity」「子どもは自分の生活する場とつながり、またそこに貢献できる Children are connected with and contribute to their world」「子どもは幸福・健康についての深い理解をもつ Children have a strong sense of wellbeing」「子どもは自信をもち、積極的な学習者である Children are confident and involved learners」「子どもは効果的にコミュニケーションできる Children are effective communicators」。そして最後の「子どもは効果的にコミュニケーションできる」という目的を達成するための、言語・非言語コミュニケーションや読み書きの能力 literacy の例として、芸術、ヴィジュアルアーツ、絵画 painting、描画 drawing が示されている⁹⁾。

日本の教育要領には、「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」¹⁰⁾、オーストラリアの学習要領にも、「子ども達はアイディア、考え、疑問や気持ちを交換すること、つまり、自分自身のことを表現すること、他者とつながることに、本質的に興味を持つ社会的な存在である」¹¹⁾という記述がみられ、オーストラリアと日本の両国において、造形は幼児のコミュニケーションの一形態であると捉えられ、感動したことや自分の気持ちを他者に伝える豊かなコミュニケーション能力を培うことが、この領域の目的となっている。一方で、それに加えて、日本では「喜び」や「楽しむ態度」という情操面での記述がよく見られるところが特徴である。

(2) 造形表現の内容の比較

次に造形表現の内容についての共通点と差異について見ていきたい。まず、両国の基準に共通して「環境構成」についての記述がある。日本の造形表現では、「様々な素材に触れて楽しむ」¹²⁾、「いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ」¹³⁾ことを大切にしており、保育士はそのための素材や材料を子どもがいつでも取り出せるようにしておく必要があるとしている。オーストラリアの学習要領にも「子どもはアイディアを表現し、多様な媒体によって意味を作る。教育者はこの学びを以下のようなときに促進させる：子どもがヴィジュアルアーツ、ダンス、演劇、音楽を使って意味を伝えることができるような、多様な材料を与える」¹⁴⁾という記述がある。両者は、大人が子どもに様々な材料を与え、表現を行うことができるような環境を構成していくことの必要性を示している。

次に、差異として3点を指摘したい。それは「日本は感性や情操面での育ちを重視していること」「日本は作ることにとどまらず、それを今後はどう生かしていくかについての記述があること」「オーストラリアは造形表現における情報化の影響を考慮していること」の3点である。

第一の点については、日本では、保育所保育指針に「生活の中で様々な出来事に触れイメージを豊かにする」¹⁵⁾、幼稚園教育要領には「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れイメージを豊かにする」¹⁶⁾という記述があり、「イメージを豊かにする」ことの重要性が指摘されている。また目的の分析のところでも触れたことである

が、日本では造形領域のもつ「喜び」や「楽しむ態度」を重視する。一方で、オーストラリアにはこのような感性や情操に関する記述は全く見られない。

第二の点については、日本の基準には「かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする」¹⁷⁾という記述があり、かいたり、つくったりしたものを、遊びや飾りに展開していくアイディアが示されている。オーストラリアにはそのような記述は全く見られない。

第三の点については、オーストラリアの基準において、「子どもは、情報にアクセスし、アイディアを深め、考えを表すために、情報通信技術を用いる。Children use information and communication technologies to access information, investigate ideas and represent their thinking. 特に、デザインし、絵をかき、編集し、深く考え、作曲するツールとして情報伝達技術を使うなど。when children: use information and communication technologies as tools for designing, drawing, editing, reflecting and composing」という記述がある。一方、日本ではこの点に関する記述は見られない。現代社会において、特に先進国では情報通信技術が浸透しており、幼児もそれに触れる機会が多い。これから先、子どもが成長するにつれて、さらに使用する頻度や必要性は増していくだろう。オーストラリアのこの記述は、現代の子どもを取り巻く状況に沿ったものであると言えるだろう。

3-2. 学童期の国家カリキュラムの比較

次に、オーストラリアの「カリキュラムの構造：芸術領域 Shape of the Australian Curriculum: The Arts」の「ヴィジュアル・アーツ Visual Arts」の5-6年生までの記述と、日本の「小学校学習指導要領解説 図画工作編」とを比較する。学童期の国家カリキュラムの比較の概要は表2に示した。なお、巻末に、「カリキュラムの構造：芸術領域」の「ヴィジュアル・アーツ」の部分の全訳を掲載した。

(1) 「ヴィジュアルアーツ」と「図画工作」のカリキュラム上の位置づけ

日本の図画工作に相当するのが、オーストラリアの「ヴィジュアルアーツ」であるが、国家カリキュラムにおける位置づけは異なっている。日本では、図画工作は「各教科」を構成する一領域であり、独立した教科としての位置づけがなされている。一方、オーストラリアでは、「国家統一カリキュラム」には、教科 Learning Areas/Subjects が8つあり、芸術 the Arts, 英語 English, 健康体育 Health and Physical Education, 人文社会科学 Humanities and Social Science (下位領域に公民 Civics and Citizenship, 経済とビジネス Economics and Business, 地理 Geography, 歴史 History), 言語 Languages, 数学 Mathematics, 科学 Science, テクノロジー Technologies からなる。芸術は、ダンス Dance・演劇 Drama・メディアアーツ Media Arts・音楽 Music・ヴィジュアルアーツ Visual Arts の5つの領域により編成されており、ヴィジュアルアーツは芸術領域のうちの1つの領域という位置付けである。これら5領域は選択科目ではなく、「オーストラリアの人はみな芸術領域の5領域に参加する」¹⁸⁾、「すべての児童が

表2. 学童期の国家カリキュラムの比較

	オーストラリア	日本
基準の名称	カリキュラムの構造：芸術領域 Shape of the Australian Curriculum: The Arts	小学校学習指導要領「図画工作」 小学校学習指導要領解説 図画工作編
カリキュラム上の位置づけ	8教科のうちの1教科の「芸術」。「芸術」を構成するダンス・演劇・メディア・アート・音楽・ヴィジュアルアートの5領域のうちの1領域。	9教科のうちの1教科。
目的	5つの領域を通して、自己肯定感を持ち、多様な人々が共生する現代において必要とされる他者理解や社会性を育むとともに、幅広い芸術領域の授業を受けることにより将来の生活や職業選択の選択肢を広げる →統合カリキュラム。職業選択	「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」 →造形的創造活動の基礎能力・感性と情操
内容 共通点① 相補的な表現と鑑賞	「芸術領域での学びは表現と鑑賞を伴う。(中略)表現と鑑賞は、互いに補い合い教えられる」 表現：「自分のアイディアや、気持ち、または個人的・共同的な経験の観察を伝えるための、アート・工作・デザイン作品を作るために、多様な道具・素材・表現手段・技術を使う」 鑑賞：「作品は彼ら自身・彼らの文化や異なる文化について教えてくれる」	「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく」 表現：「表したいことや用途などを考えながら、形や色、材料などを生かし、計画を立てるなどして表す」 鑑賞：「自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞する」
内容 共通点② 発達段階と内容の難化・複雑化	基本：「造形活動を楽しみ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする」上位学年では、この内容が難化・複雑化していく。	基本：「さまざまな材料や技法などを学び始め、自分の内面をどのように表現することができるのかを“学び始める”」上位学年では、この内容が難化・複雑化していく。
内容 差異① 情操の育成	《記述なし》 ※感性は芸術作品を鑑賞するときに必要な。	「感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」
内容 差異② 遊びとの関係	《記述なし》 ※遊びは、他者とのコミュニケーションスキルを高める手段。	内面に起る発想・構想・創造力・想像力を広げていくための手段として、造形遊びが指導される →手段としての造形遊び
内容 差異③ 芸術産業とのかわり	子どもの芸術的能力を育てるだけでなく、子どもとともに、アーティストも教師も成長し、アート産業自体を活性化していくことが目指されている。 →アート産業との密接な関わり	地域の芸術産業を通して児童の鑑賞能力を育てる。 →鑑賞の対象
内容 差異④ 文化の内容	「アボリジニ・トレス海峡諸島民の歴史と文化」「アジアについてと、オーストラリアとアジアのつながり」	「自分たちの伝統的な文化を大切にするとともに、諸外国の文化を尊重する態度を育てる」
基準と実践との関係	基準は指針。教科書もなく、教師の裁量権が大きい。 →担当教員によって、扱う内容や指導方法に多様性が見られる可能性が高い。	さまざまな素材の取扱いについて、またどの学年でどんな道具を使用できるようになるのかなど、詳細に明記される。教科書が日々の実践のガイドになる。 →日本全国、ほぼ同質の授業が展開される可能性が高い。

※「」表記は要領・基準からの抜書きである。

芸術領域の5領域を学ぶ¹⁹⁾という記述から、児童は5つの授業すべてを受けるものと考えられる。ただし各授業の時間数については、準備級（Foundation、日本の年長児に相当）～2年生で120時間、3～4年生で100時間、5～6年生で100時間と設定されているものの、どの領域にどれくらいの比重を置くのかは各学校の裁量に任されている²⁰⁾。芸術領域の5領域すべて合わせて、1年間で約40～50時間の授業が行われるということなので、日本の図画工作の授業時数が1年間で50～70時間配当されていることと比較すると、かなり少ないことがわかる。

オーストラリアでは芸術領域の5領域を総合的に学ぶことが重視されており、子どもの芸術性は、5つの領域すべてが合わさることによって育成されると考えられている。

(2) 造形表現の目的の比較

日本の図画工作の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う²¹⁾と明記されている。一方、オーストラリアのヴィジュアル・アーツでは、明確な目的は示されていない。そこで、カリキュラムの内容から、領域の目的と思われる部分を抜き出し、推測していきたい。参考にしたカリキュラムの内容は、以下の通りである。

「このような教育（芸術性豊かな教育）は、想像力や独創性だけでなく、アートから生ずる文化理解と社会調和を強調し、児童の、個人としての成功、社会のメンバーとしての成功にきわめて重要である²²⁾。」「児童は芸術が創造的なコミュニティと文化の中心であることを学ぶ。芸術はコミュニティの創造的・文化的生活の裏付けを与える²³⁾。」「芸術領域では、特に他の時代や文化の作品や、見慣れない材料が使用された作品に出会った時、生徒は、何を質問すべきか知っていることが必要である。若いオーストラリア人は、芸術とつながりを持つことに自信を持つこと、彼らの社会的・文化的・歴史的な文脈と同様に、現代の芸術表現のあらわれへの理解をすることが必要である²⁴⁾。」「批評的で創造的な思考者として、生徒は自信と、日々触れる芸術に対する理解と批評の手段を獲得する。（中略）芸術領域での学びを通して、生徒はアーティストが個人・グループの両方で働きがあり、芸術は活気みなぎる現代の包括的なオーストラリアの社会の発展に貢献する創造的主流産業と繋がりがああるということを知る²⁵⁾。」「一般的能力とは、21世紀に生徒がうまく生活し働くことをアシストする知識・スキル・性質のことである²⁶⁾。」「芸術領域の授業を通して、読み書きの能力、数字・数学の能力、情報通信技術（ICT）能力、批評的・創造的思考、道徳的姿勢、個人の能力・社会的な能力、異文化理解といった一般的能力を身につけていくことを明示している²⁷⁾。」「すべての若者に芸術を学ばせる基本的な考えは職業的というよりも基礎教育的なものであるが、専門家になりうる潜在能力を持つ子を見出し、芸術産業におけるキャリアの基礎を築くことも、学校の大切な役割である。オーストラリアの芸術領域のカリキュラムは、児童に5つの芸術領域の領域すべてを受ける機会と、一領域以上に対する潜在的興味の度合いと適正を発見する機会を、学校教育を進める

中で与える」²⁸⁾。

以上の記述から、オーストラリアの芸術領域の目的は、5つの領域を通して、自己肯定感を持ち、多様な人々が共生する現代において必要とされる他者理解や社会性を育むとともに、幅広い芸術領域の授業を受けることによって将来の生活や職業選択の選択肢を広げることであると読み取ることができる。

以上の比較から、日本では、造形表現は、芸術の基礎的能力を身に付けさせること、それと同時に「感性」「喜び」「豊かな情操」などの情操面での育ちを大切にしていること、一方で、オーストラリアは、芸術の基礎的能力を身に付けさせることや、想像力や独創性を身に付けさせることを目指すところは共通するものの、社会の成員として最低限共有しておくべき芸術的リテラシーを伝授し、特別な能力を有するものにとっては、芸術が職業選択のひとつとなるような教育を行うことを大切にしているという違いがあることを見出すことができる。

(3) 造形表現の内容の比較

次に造形表現が扱うべき内容について、両国に共通する記述と、差異のみられる記述について見ていきたい。

① 共通する項目

まず共通する点は2つあり、第一にこの領域が「表現と鑑賞」の2つからなっていること、そして表現と鑑賞の両方の内容に、共通した内容を含むこと、第二に基準に記載される内容が子どもの発達段階に応じて難化・複雑化することである。以下にこの2つについて詳細に見ていきたい。

第一の「表現と鑑賞」については、日本では、目標に「表現及び鑑賞の活動を通して」と示されているように、「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動」²⁹⁾としている。一方、オーストラリアでも、「芸術領域での学びは表現と鑑賞を伴う。(中略)表現と鑑賞は、互いに補い合い教えられること」³⁰⁾と述べられており、表現と鑑賞を通して授業が展開されることが明記されている。日本でもオーストラリアでも、表現と鑑賞が相互に補い合い、子どもの能力を伸ばしていくという点で共通する。

「表現」の領域においても、共通した記載が見られる。発達段階に応じて、表現したいものを自分の思いのままに表わす技術を高めていくことが目指されているのである。日本の学習指導要領の1-2年生の欄では「表し方を考えて表す」³¹⁾、3-4年生では「表したいことや用途などを考えながら、形や色、材料などを生かし、計画を立てるなどして表す」、「表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表す」³²⁾、5-6年生では「形や色、材料の特徴や構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、表し方を構想して表す」、「表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法などを組み合わせるなどして表す」³³⁾と述べられており、表現の意図や特徴を理解し、さまざまな技法を駆使し

て、自分なりの表現を行うことが求められている。オーストラリアにおいても、準備級から2年生の欄では、「自分のアイディアや、気持ち、または個人的・共同的な経験の観察を伝えるための、芸術作品・工作・デザイン作品を作るために、多様な道具・素材・表現手段・技術を使う」³⁴⁾、3-4年生では「自分の意図に沿い、アイディアを表現し、芸術作品を生み出すために、従うべき規定ややり方を選ぶための選択をする」³⁵⁾、5-6年生では「自分の表現したい欲求に合わせて表現技術やプロセスや形を選択し（中略）アートを探求・創造・制作・発表する」³⁶⁾と述べられている。日本もオーストラリアも、自分の意図を表現するための方法を学び、試しながら探索し、選択して制作していけるような能力を身に付けていくことが求められている。

一方の「鑑賞」の分野においても共通する内容が含まれている。それは、両国の鑑賞の学習のなかには、鑑賞する作品のなかに使われている技法を見出すこと、そして文化に関する学習を含むことである。

鑑賞する作品のなかに使われている技法を見出すことについては、日本の学習指導要領では、高学年になると鑑賞活動で「表現の意図や特徴などをとらえること」³⁷⁾という記述がみられる。オーストラリアでも、3-4年生で「視覚文化における従うべき規定、象徴されているもの、意味に気づくようになる」³⁸⁾という記述があり、小学校全体に共通する概要にも「従うべき規定ややり方を学び（中略）ヴィジュアルアーツへの理解を深める」³⁹⁾、「視覚芸術には意図があり、それが表現にも表れている」という記述がみられる。すなわち、鑑賞する作品の中に、作者の表したかったもの、作者の意図を見出し、それを表現するために用いられている技法を見出し、それらの発見を自らの表現のなかにも援用していけるようになることが目指されている。

鑑賞の分野において文化に関する学習を含むことについては、オーストラリアでは、鑑賞分野について以下のように述べられている。「作品は彼ら自身・彼らの文化や異なる文化について教えてくれる」⁴⁰⁾（準備級～2年生）、「伝統文化や大衆文化についての学びを通して、生徒は、視覚的・審美的理解を深め、視覚文化における従うべき規定、象徴されているもの、意味に気づく」⁴¹⁾（3, 4年生）、「歴史的・現代的な文化状況のなかで、芸術作品・工作・デザインを批評的に分析し（中略）反応していく」⁴²⁾（5, 6年生）。以上のように、作品の意味やプロセスについて考え、意見や好みを話し合い、年齢が上がるにつれて歴史的・文化的な文脈から作品を分析するようになっていくことが示され、特に文化と芸術作品とのつながりが強調されている。この文化と芸術の関係性は「考慮すべき事項 Considerations」の「文化 Culture」の項目でも言及されており⁴³⁾、オーストラリアでは重視されている考え方である。

日本でも高学年になると「自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品など」⁴⁴⁾を鑑賞すると述べられており、学年が上がるにつれて社会や文化を取り入れ、より深く鑑賞していくことになる。そして様々な文化的文脈の中で作られた芸術作品を見て話し合う。オーストラリアと日本において共通して、造形と文化・社会との関連が重視されているのであり、異文化を受容し、尊重しつ

つ、自らの考えを言葉に表すことが求められている。

第二の「基準に記載される内容が子どもの発達段階に応じて難化・複雑化すること」については、日本の目標(2)で、1, 2 学年では「造形活動を楽しみ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする」⁴⁵⁾と書かれており、さらに、3, 4 学年になると、表し方を工夫することや、造形的な能力を伸ばす、ということが付け加えられ⁴⁶⁾、5, 6 学年では、材料などの特徴を捉え、主題の表し方を構想すること、ということが加えられる⁴⁷⁾。オーストラリアの「表現」に関する記述では、準備級から2年生では、さまざまな材料や技法などを学び始め、自分の内面をどのように表現することができるのかを“学び始める”⁴⁸⁾。3-4年生になると、自分の意図に沿って表現するため、「従うべき規定ややり方 codes and conventions」を選択できるようになる⁴⁹⁾。そして5-6年生になると、今までよりもさらに緻密で複雑化した計画をもとに、自分なりの表現を芸術に込めていく⁵⁰⁾ということが加えられている。このように、両国に共通して、学年段階によらず造形表現における目的はそれぞれ一貫しているものの、学年が上がるにつれて、身に付ける技術や表現・鑑賞の内容が、難化・複雑化していくのであり、各学年の子どもの発達と能力に合わせたカリキュラムになっている。

② 差異の見られる項目

差異の見られる項目としては、「日本では情操の育成に重点が置かれている」「日本では“造形遊び”という言葉にも表れているように造形と遊びは強い関連性を持つ」「オーストラリアでは芸術産業との関わりを重視する」「両国において重視する文化の内容が異なる」の4点を指摘したい。

第一の「日本では情操の育成に重点が置かれている」という点については、日本の学習指導要領では、目標として「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」と謳われ、「感性」「喜び」「豊かな情操を養う」と言及されており、自己表現の欲求を満たすことや、豊かな情操を養うことが最終的な目的として掲げられている。一方、オーストラリアでは、子どもの感性や情操について触れる記述はない。ただし鑑賞活動について述べている箇所では、「センス、思考と感情を通して芸術作品に反応する」⁵¹⁾とし、感情が芸術作品を評価するために必要な要素であることを示しているが、これは日本が情操を養うことを目的とするのに対して、感情はあくまで芸術作品を鑑賞するための手段であるということである⁵²⁾。芸術には心の動きが必須であるという考えは共通しているものの、日本はそれが目的とされ、オーストラリアでは手段とされているという点で大きく異なっている。

第二の「日本では“造形遊び”という言葉にも表れているように造形と遊びは強い関連性を持つ」という点については、日本の学習指導要領では、各学年の表現内容で、必ず造形遊びについて記述されている。造形遊びは、日本では幼児期はもちろんのこと、低学年だけでなく小学校6年生まで一貫して組み込まれている内容である。

他者とのコミュニケーションを伴い、たとえば3-4学年の項目で「新しい形をつくる」とともに、その形から発想したりみんなで話し合ったり考えたりしながらつくる⁵³⁾と書かれているように、お互いに発想を刺激し合うことが求められている。しかし、オーストラリアが重視する「コミュニケーション能力」を高めるため、ということよりも、「形や色などを基に思い付いてつくる」「感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくる⁵⁴⁾」「発想し想像力を働かせてつくる⁵⁵⁾」という記述から読み取れるように、一人一人の内面に起きる発想・構想・創造力・想像力を広げていくための手段として、造形遊びが指導されている。

オーストラリアでは、ヴィジュアルアーツ内では造形遊びについての記述はない。ただし芸術領域全体でみると、考慮すべき事項のキーワードの中で「遊びを通した学び」の記述が見られる。ここでは、「遊びを通した学びは、芸術分野において重要である。遊びと芸術は基本的に関連する。遊びを通した学びは約束、コミュニケーション、そして目的意識を通して発展する⁵⁶⁾」。「遊びは、“想像力、発見、実験を通して学ぶ”“社会的グループを作る”“お互いの考えにぶつかる”“新たな理解を築く”という経験をさせてくれる⁵⁷⁾」とあり、遊びは、他者とのコミュニケーションスキルを高める手段とされている。つまり、日本の造形遊びのように、造形表現の能力を伸ばすための活動としては位置づけられていない。

第三の「オーストラリアでは芸術産業との関わりを重視する」という点については、「学校教育に芸術産業をどのような目的でどのように取り入れるか」「芸術産業を担う人々と、教師・子ども達がどのような関係性で関わるか」という2点で大きな違いがみられた。

日本では、学習指導要領の「内容の取扱いと指導上の配慮事項」の欄において、「各学年の“B鑑賞”の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること」と述べられ、「施設が提供する教材や教育プログラムを活用する、学芸員などの専門的な経験や知識を生かして授業をする」などの取り組みが考えられるとして、地域の芸術産業を通して児童の鑑賞能力を育てるよう示している。さらにこの鑑賞活動では、「児童一人一人が能動的な鑑賞ができるように配慮する必要がある」としている⁵⁸⁾。ここから日本では芸術産業は、子ども達の鑑賞の対象であると認識されていることが分かる。

一方、オーストラリアの「芸術産業とコミュニティThe Arts industry and Community」の項目では、「芸術産業および団体は、芸術産業が児童に与える機会を強化することが求められる21世紀の芸術領域カリキュラムに、欠くことができない⁵⁹⁾」として、児童が芸術産業や団体に参加していくことの重要性を唱えている。さらに「若い人々は重要な観客である。彼らの家族やコミュニティとともに、職業芸術家や団体を巻き込んだ芸術展や、画廊、劇場、映画館や演奏会場などの指定された芸術の場を訪れ、身体的または視覚的に参加する⁶⁰⁾」。「オーストラリアの芸術領域カリキュラムは、若い人々が職業芸術家や芸術団体とつながりを持つ機会を、数々の適切な方法で促進す

る」⁶¹⁾として、芸術に関する能力は、学校だけでなく、家庭や地域、さらに職業芸術家など、様々な人が関わることで伸びていくのだと述べている。そして「身体的または視覚的に参加する」という記述から見られるように、芸術産業とのかかわりの中で育てたい子どもの能力は、鑑賞だけでなく表現も含まれている。また、訪問する施設について、日本は「美術館や博物館」としているところを、オーストラリアはそれだけでなく「職業芸術家や団体を巻き込んだ芸術展」と対象が幅広いことが特徴である。加えて、子どもの学習の機会としてだけでなく、「芸術領域カリキュラムは学校の教師、職業芸術家、芸術に関する団体に、児童の芸術の学びと経験を深めていく機会を提供する。学校とアート産業の関係は、教師と芸術家に、相互の専門性の発展の機会を与える」⁶²⁾として、互いに能力を伸ばしていくための機会であると示されている。以上から、オーストラリアでは、学校教育における芸術教育と芸術産業は補完的・相互共栄的な関係におかれていることが見て取れる。

さらに、芸術産業との関わりを重視するオーストラリアでは、芸術の教育のなかで、芸術や芸術家の社会的役割を理解させ、子どもも芸術家・批評家のひとりとして主体的に芸術に参加する態度と意欲を育てることが重視されている。

芸術や芸術家の社会的役割については、準備級から2年生の欄で、「芸術作品・芸術家・デザイナーには、彼らの社会の中での役割があること、特定の作品は彼ら自身・彼らの文化や異なる文化について教えてくれるということを理解し始める」⁶³⁾、3,4年生では「彼らの社会の中でのアート・工作・デザインの位置や機能について話し合う」⁶⁴⁾、5,6年生では「社会とアート産業の中でのアーティストの役割について、さらなる理解を示していく」⁶⁵⁾と述べられ、社会における芸術・美術・アーティストの役割や位置について学ぶことが求められている。

子どもも芸術家・批評家のひとりとして、主体的に芸術に参加する態度と意欲を育てることが重視されることについては、全学年共通の内容に「芸術家、デザイナー、観客、歴史家、批評家として、芸術とデザインの世界や、芸術産業に積極的に参加するようになる」⁶⁶⁾と述べられ、5,6年生では「歴史的・現代的な文化状況のなかで、芸術・工作・デザインを批評的に分析し、芸術・デザイナー・観客・歴史家・批評家として、芸術に適した用語を用いて反応していく」⁶⁷⁾と述べられている。すなわち、児童は授業を通して、芸術家、デザイナー、観客、歴史家、批評家としての視点を持ち、それぞれの専門家としての能力を高め、芸術産業へ参加する基盤を作っていくことが求められているのである。

両国において、以上のような違いが生じる背景として、日本は芸術を子どもの感性を育てる手段ととらえる傾向が強く、芸術産業を下支えする芸術家・批評家・愛好家を育てる視点が乏しいこと、一方で、オーストラリアは芸術産業を主要産業のひとつととらえ、学校教育を通じて、芸術産業を支える人材を育成していこうという思いがあり、子ども達に対しては、将来の職業選択のひとつとして芸術家や芸術に関する仕事がありうることを伝えようとするところがあるように感じられる。

第四に、両国において重視する文化の内容が異なるという点については、日本においては、「生活や文化などによる感じ方の違いにも配慮しながら、自分たちの伝統的な文化を大切にするとともに、諸外国の文化を尊重する態度を育てることも重要である」⁶⁸⁾と述べられ、文化の内容は、日本の伝統文化と諸外国の文化が明示されているのに対し、オーストラリアでは、記述の内容が具体的で戦略的である。オーストラリアでは、学校教育の中でアボリジニのアートやアジアとの繋がりについて学ぶことが重要とされている。また多様な文化や世界に目を向けたカリキュラムは、多民族国家であるオーストラリアならではのものである。以下は、「芸術領域とクロス・カリキュラムの方針 The Arts and the Cross-Curriculum Priorities」に記されているものである。

オーストラリアのカリキュラムは子どもの生活に関連し、また彼らが直面する今日の課題を扱わねばならない。これらの事柄を心に留め、オーストラリアのカリキュラムは以下のようなクロス・カリキュラムの方針に特別な注意を払う。「アボリジニ・トレス海峡諸島民の歴史と文化」「アジアについてと、オーストラリアとアジアのつながり」「持続可能性」。オーストラリアの芸術領域カリキュラムでは、これらの方針が下位領域によって大きく多様に存在する。⁶⁹⁾

アボリジニとトレス海峡諸島民の歴史・文化に関して、芸術領域では「現存する世界最古の文化の一つ」⁷⁰⁾であるアボリジナル・アートに触れ、それがコミュニティのなかでどのような役割を持っているのかを学ぶ。先住民文化はオーストラリアの国としてのアイデンティティを形成する大切な要素となっており⁷¹⁾、このような学びを通して、子どもたちは、アボリジニやトレス海峡諸島民などの先住民族に対して理解を深め⁷²⁾、また敬意をもって彼らと共存し、オーストラリアの文化を身につけることで、自らのアイデンティティも築き上げていく。

またオーストラリアはアジア地域と強固な関係性を維持しており、オーストラリアの民族構成やそれに伴う文化的・社会的な多様性に大きな影響を及ぼしてきた⁷³⁾。これはもちろん芸術にも影響を与えていると考えられ、そのためオーストラリアの子どもたちはアジア圏の国の芸術について学ぶのだと思われる。さらにオーストラリアの芸術領域の授業では、持続可能性と社会制度、経済体制、生態系の相互関係性について探り、芸術を用いて持続可能性についての理解を深めていくことも求められている⁷⁴⁾。ヴィジュアルアーツの授業でもこのような知識を学び、芸術につなげていくことで、自国についての理解を深め、社会貢献に対する関心や態度を育てていく。この態度や関心は、ヴィジュアルアーツの目的である「多様な人々が共生する現代において必要とされる他者理解や社会性」を育てていくことにつながる。

(4) 基準が教師の日常の実践に与える影響の違い

最後に、基準の内容と構成の違いが、教師の日々の実践に与える影響の違いについ

て考察したい。日本では「指導計画の作成と内容の取扱い」の項目で、さまざまな素材の取扱いについて、またどの学年でどんな道具を使用できるようになるのかなど、詳細に明記されている⁷⁵⁾。また、学年ごとに、目標と内容を詳細に記述することで、指導者が学習指導要領を参照しながら、児童を指導していけるようになっている。さらに、日本の小学校では検定教科書を用いて授業を進めるため、学校や教師により、その指導内容が大きく異なるということはない。

一方、オーストラリアの芸術領域の教科では、指導計画に関しては、国家基準のなかの「オーストラリアの芸術カリキュラムの構造 Structure of the Australian Arts Curriculum」「考察 Consideration」「芸術領域と横断的カリキュラム The Arts and the Cross-Curriculum Priorities」に書かれた記述を参考に、児童への指導や援助の方法が組み立てられると考えられる。しかしながら、指導や援助の留意点が日本ほど詳細に述べられていないうえに、教科書もなく、教師に授業内容や方法を決める裁量権が与えられているため、オーストラリアのヴィジュアルアーツの授業は、内容と構成ともに、学校や教師によって多様であることが予想される。

4. おわりに

造形領域の国際比較研究は、オーストラリアを対象とするものは皆無であるものの、これまでさまざまな国を対象に行われてきた。最後に、他国における比較研究で得られた知見も含め、オーストラリアの事例から分かったことを用いながら、日本の造形表現の特徴とその課題について考察していきたい。

先行研究を分析したところ、造形領域のカリキュラムには、3つの重要な論点があることが分かった。①国家基準を持つか否か。持つ場合、教師の裁量権をどの程度認める構成になっているか。②子どもの感性や創造性を重視する“子ども中心主義的な教育観”と、美術科というディシプリンの成立を目指す“教科中心主義的な教育観”の両極のうち、どこに位置づくか、③造形領域の科目が、子ども達の何を育て、それが社会にどう役立ちうるのかという“領域の社会的存在意義”をどう示しているか、の3点である⁷⁶⁾。

この3つの軸に照らし合わせると、オーストラリアの造形領域のカリキュラムは次のように解釈することができる。①幼児教育段階においては、国家基準に明確な位置づけを持たないが、学童期以降では、教科の1つとなるため、明確な国家基準をもつ。かつ、この国家基準は教科の方針を示すものであり、教師の裁量権を多く認めるものとなっている。②幼児教育段階では、造形表現は子どものコミュニケーションの一形態であるという位置づけであり、子ども中心主義的な教育観に基づくが、学童期以降は、芸術家・批評家・聴衆という芸術を下支えする市民の育成を目指した、美術科のディシプリンを重視するカリキュラムとなっており、子ども中心主義的な「感性」「創造性」「人間の形成」的側面に対する記述は極めて乏しい。③社会的存在意義

としては、オーストラリアの主要な産業のひとつである芸術産業を下支えする市民の育成に寄与し、個々人に対する存在意義としては、全ての人々の生活を豊かにし、才能が見出されたものについては芸術が将来の職業となる芸術家を養成するという意義をもつ。

次に日本の造形領域のカリキュラムは次のように解釈することができる。①幼児教育段階と学童期において、明確な国家基準をもち、指導内容や方法についても詳細な記述があることから、教師の裁量権はその枠内において発揮されるものとなる。②幼児教育段階と学童期において、子ども中心主義的な教育観を大切にしている。ただし、学童期においては、学年があがるにつれて造形表現の高度な技術や知識も扱われるようになるため、芸術としてのディシプリンを重視した教科中心主義的な教育観の色彩が加わる。今回は分析に含めなかったが、中等教育以降はこの教科中心主義的な教育観の色彩が強まっていくことが予想される。③社会的存在意義については、子どもの感性や創造性を育み、子ども達の人間的成長を下支えする大切な科目であるという位置づけは繰り返し出てくるものの、社会的存在意義については、ほとんど言及がない。

国際比較研究を通して、日本の造形領域が、世界に例を見ないほどに、児童中心主義的な教育観に基づいており、さらにそれが国家基準のなかで明確に詳述されているという特徴があることが分かった。一方で、作品主義を問題視するさまざまな言説を通して、日本の造形領域の理念が、実践レベルではなかなか実現していくことが難しいという実態も垣間見られた。

今後は、これらの国家基準の違いが、両国の教育実践と子ども達の成長にどのような影響を与えているのかについて、実際に実践の分析を通して、明らかにしていきたいと考えている⁷⁷⁾。

参考資料

Shape of the Australian Curriculum: The Arts (Visual Arts) 和訳

概要：ヴィジュアルアーツ 1-12年生

54. ヴィジュアルアーツでは、二次元・三次元・四次元の芸術とデザインの作品、そして概念・理論・歴史・批評との直接的な関わりを通して、生徒は学ぶ。彼らは、芸術家・デザイナー・批評家・観客としての、スキル・知識・理解・技術を高めていく。生徒は、創造的に関わることを通して、芸術作品・工作・デザイン作品を作り、発表することを通して、また、これらの作品とプロセスに批判的に関わることを通して、アイデアを広げていくことを学ぶ。さまざまな素材・デザイン要素・テクノロジー・プロセスを用いながら作り、芸術作品・工作・デザイン作品についてのスキル・知識・理解を高めていく。伝統的・先進的な技術を使うことによって、多様な表現手段の特質を理解し、利用することを学ぶ。彼らは、従うべき規定ややり方を学び、また、特定の歴史・理論・文化により形作られた知識分野としての、ヴィジュアルアーツへの理解を深める。生徒は、批評的に分析し、評価し、芸術制作や鑑賞における個人的・集団的な文脈について理解することを学び、これらを多角的な視点からとらえることができるようになる。彼らは、芸術家、デザイナー、観客、歴史家、批評家として、芸術作品とデザインの世界や、芸術産業に積極的に参加するようになるだろう。

準備級～2年生

55. 生徒はヴィジュアルアーツ作品を作り、また鑑賞することを通して学ぶ。自分のアイディアや、気持ち、または個人的・共同的な経験の観察を伝えるための、芸術作品・工作・デザイン作品を作るために、多様な道具・素材・表現手段・技術を使う。これによってスキルを高め、プロセスについて学ぶことを始める。生徒は、ヴィジュアルアーツの用語を使い始めながら、芸術作品を見て、自分が見たものについて話し合う。芸術の、異なる目的や内容に気付きはじめ、(好き嫌いなどを) 区別しはじめ、観客として関わり始める。芸術作品・芸術家・デザイナーには、彼らの社会の中での役割があること、特定の作品は彼ら自身・彼らの文化や異なる文化について教えてくれるということを理解し始める。

3, 4年生

56. 生徒は、道具・素材・表現手段・技術の活用を意識的に試みることで、スキルを磨いていく。自分の意図に沿い、アイディアを表現し、芸術作品を生み出すために、従うべき規定ややり方を選ぶための選択をする。自分の作品を他者に見せることを学び、展覧会を含むプレゼンテーションには目的があるということを理解する。作品に対する反応については、意見や好みについて伝え、ヴィジュアルアーツに適した用語を用いながら、自身や他者の作品のプロセスや意味について話し合う。伝統文化や大衆文化についての学びを通して、生徒は、視覚的・審美的理解を深め、視覚文化における従うべき規定、象徴するもの、意味に気づくようになる。彼らの社会の中での芸術作品・工作・デザインの位置や機能について話し合う。

5, 6年生

57. 生徒は芸術作品やデザインの実践を通して、アイディアを組み合わせ、編集し、洗練し、広げていく。彼らは、自分の表現したいニーズに合わせてテクノロジーやプロセスや形を選択し、操作するうえで、より緻密な計画と、より高まったスキルを用いて、芸術を探索・創造・制作・発表する。彼らは、デザイン要素・技法・形において、ますます高まる複雑性を認識するとともにそれを取り扱い、実践における決定を評価し、反省し、洗練させる。彼らは、場所、スペース、目的、状況を自覚しながら、自分の作品を発表する。生徒は、審美的基準を当てはめ、自分や他者の作品に対する好みについての理由を伝えあいながら、多様な芸術作品やスタイルに反応していく。歴史的・現代的な文化状況のなかで、芸術作品・工作・デザインを批評的に分析し、芸術家・デザイナー・観客・歴史家・批評家として、芸術に適した用語を用いて反応していく。社会と芸術産業の中での芸術家の役割について、さらなる理解を示していく。

■註

本論文で主に参照した資料は以下の4点である。註においては、以下に示す略記を用いる。

① オーストラリアの幼児教育の国家基準（略記：豪幼児基準）

「幼児期の学習要領 Belonging, Being & Becoming: The Early Years Learning Framework」Australian Government Department of Education, Employment and Workplace 発行、2009年。全文は以下のサイトで参照可能である。http://files.acecqa.gov.au/files/National-Quality-Framework-Resources-Kit/belonging_being_and_becoming_the_early_years_learning_framework_for_australia.pdf（平成26年9月9日接続確認）

② 日本の幼児教育の国家基準（略記：日本幼児基準）

ミネルヴァ書房編集部編『保育所保育指針・幼稚園教育要領 解説とポイント』、ミネルヴァ書房、2008年。

③ オーストラリアの小学校教育（芸術領域）の国家基準（略記：豪小学校基準）

カリキュラムの構造：芸術領域（Shape of the Australian Curriculum: The Arts）

Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority 発行, 2011年。全文は以下のサイトで参照可能である。http://www.acara.edu.au/verve/_resources/Shape_of_the_Australian_Curriculum_the_arts_-_Compressed.pdf (平成26年10月17日接続確認)

- ④ 日本の小学教育校(図画工作)の国家基準(略記:学習指導要領)
文部科学省編『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 2008年。全文は以下のサイトで参照可能である。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_008.pdf (平成26年10月30日接続確認)
- 1) 降旗孝「教育力向上のための教員研修の要素と内容」山形大学『教職・教育実践研究』第7号, 2012年, 45～54頁。
- 2) 藤原逸樹「幼児美術教育における保育者のかかわりに関する研究」美術教育学:美術科教育学会誌(29), 2008年, 501-512頁。
- 3) 上記①参照
- 4) 上記②参照
- 5) 上記③参照
- 6) 上記④参照
- 7) 日本幼児基準, 15頁, 21～22行目, 253頁, 15～16行目
- 8) 日本幼児基準, 126頁, 4～12行目
- 9) 豪幼児基準, 38頁, 23～27行目
- 10) 日本幼児基準, 16頁, 6行目, 253頁, 下から2行目
- 11) 豪幼児基準, 38頁, 7行目～11行目
- 12) 日本幼児基準, 15頁, 一番下の行
- 13) 日本幼児基準, 16頁, 9行目, 254頁, 2行目
- 14) 豪幼児基準, 42頁, 2行目, 右側1～2行目, 6～8行目
- 15) 日本幼児基準, 16頁, 5行目
- 16) 日本幼児基準, 253頁, 下から4行目～下から3行目
- 17) 日本幼児基準, 16頁, 12行目, 254頁, 5行目
- 18) 豪小学校基準, 4頁, 8～9行目
- 19) 豪小学校基準, 4頁, 11～12行目
- 20) 豪小学校基準, 4頁, 下から8行目～下から5行目
- 21) 学習指導要領, 74頁, 3行目
- 22) 豪小学校基準, 3頁, 3～6行目(introduction)
- 23) 豪小学校基準, 3頁, 11～13行目
- 24) 豪小学校基準, 3頁, 15～19行目(The Arts and the General Capabilities)
- 25) 豪小学校基準, 3頁, 20～21行目, 23～25行目
- 26) 豪小学校基準, 23頁, 2～3行目
- 27) 豪小学校基準, 23～24頁
- 28) 豪小学校基準, 25頁, 19～22行目(The Arts Industry and Community の Career in the Arts の部分)
- 29) 学習指導要領, 6頁, 最後の行～7頁, 2行目
- 30) 豪小学校基準, 5頁, 4～6行目(Structure of the Australian Arts Curriculum)
- 31) 学習指導要領, 74頁, 下から17行目
- 32) 学習指導要領, 75頁, 12～15頁
- 33) 学習指導要領, 76頁, 6～9行目
- 34) 豪小学校基準, 16頁, 18～20行目
- 35) 豪小学校基準, 16頁, 下から8行目～下から7行目
- 36) 豪小学校基準, 17頁, 3～6行目
- 37) 学習指導要領, 76頁, 15行目

- 38) 豪小学校基準, 16頁, 下から3行目～下から2行目
- 39) 豪小学校基準, 16頁, 11～12行目
- 40) 豪小学校基準, 16頁, 下から12行目～下から11行目
- 41) 豪小学校基準, 16頁, 下から4行目～下から2行目
- 42) 豪小学校基準, 17頁, 10～11行目
- 43) 豪小学校基準, 20頁, 17～22行目
- 44) 学習指導要領, 76頁, 12行目
- 45) 学習指導要領, 74頁, 9～10行目
- 46) 学習指導要領, 74頁, 下から3行目～下から2行目
- 47) 学習指導要領, 75頁, 下から10行目
- 48) 豪小学校基準, 16頁, 17～19行目
- 49) 豪小学校基準, 16頁, 下から8行目～下から7行目
- 50) 豪小学校基準, 17頁, 3～6行目
- 51) 豪小学校基準, 5頁, 下から8行目
- 52) 豪小学校基準, 5頁, 下から8行目～下から3行目
- 53) 学習指導要領, 75頁, 5～6行目
- 54) 学習指導要領, 74頁, 15～16行目
- 55) 学習指導要領, 75頁, 下から3行目
- 56) 豪小学校基準, 20頁, 下から12行目～下から10行目
- 57) 豪小学校基準, 20頁, 下から6行目～下から2行目
- 58) 学習指導要領, 65頁, 下から13行目～下から4行目
- 59) 豪小学校基準, 25頁, 2～3行目
- 60) 豪小学校基準, 25頁, 5～8行目 (participation and community)
- 61) 豪小学校基準, 25頁, 10～12行目
- 62) 豪小学校基準, 25頁, 下から4行目～一番下の行
- 63) 豪小学校基準, 16頁, 下から13行目～下から10行目
- 64) 豪小学校基準, 16頁, 下から2行目～一番下
- 65) 豪小学校基準, 17頁, 12～13行目
- 66) 豪小学校基準, 16頁, 15～16行目
- 67) 豪小学校基準, 17頁, 10～12行目
- 68) 学習指導要領, 28頁, 13～15行目
- 69) 豪小学校基準, 21頁, 2～9行目
- 70) Australian Government Department of Foreign Affairs and Trade 「Australia in brief」 36頁, 3～4行目。
全文は以下のサイトで参照可能である。(平成26年10月30日接続確認)。 australia.or.jp/repository/embassy/files/aib/aus_in_brief2013_web.pdf
- 71) 同書, 36頁, 7～10行目
- 72) 豪小学校基準, 21頁, 12～16行目
- 73) 前掲書, Australian Government Department of Foreign Affairs and Trade, 24頁
- 74) 同書, 22頁, 7～9行目
- 75) 学習指導要領, 76頁, 下から2行目～77頁, 10行目
- 76) 山田真紀・森文乃「オーストラリアの小学校における図画工作の授業の実態と課題—シドニー市の公立小学校での参与観察から—」『椋山女学園大学論集』第46号, 社会科学編, 2015年(印刷中)
- 77) 山田真紀・森文乃, 前掲論文。